

湯浅泰雄著『ユングと東洋』

人文書院， 1989年， 上下各2270円

葛 西 賢 太

「ユングに親しむに連れて、私にとって次第に問題になってきたのは……『東洋についてのユング』という新しいテーマである。一般的に言い直せば、深層心理学が東洋の伝統的文化遺産と現代人の心の問題の関係について新しい光りを投じたとすれば、われわれ東洋人はそこからどのような課題を見出してゆくべきか、という問いである」

(湯浅・黒木訳『東洋的瞑想の心理学』，湯浅

による「序説」より)

「『ユングについての東洋』を知るための手引き」と湯浅の言う『東洋的瞑想の心理学』翻訳から6年、本書はおそらくこの「新しいテーマ」が具体化したものと考えられる。日本において、ユングについての解説書・研究書は数多く出版されている。そこへ新たに加えられた本書の意義はどのようなものであろうか。湯浅が東洋思想を長年研究している

ことからすれば、当然その方面からのユングの検討が行われるものと期待できる。浅学を省みず、私なりにコメントを試みてみたいと思う。

1. 本書の構成

まず、本書の構成と内容について概略を紹介しよう。上下2巻、序章に加えて6章で構成される本書の内容は、ユングの関心の広さから察せられるように、非常に多岐にわたっている。

序章は、ユングが東洋的なものに引かれ、ヨーロッパ中心的世界観の中で精神的な異端者となっていった経過について述べている。そして、ユングの研究と東洋との関わりについて、単なる東洋趣味ではなく、ユングが西洋（の錬金術）の中に捜し求めつつ得られなかった、集合的無意識や元型の歴史的な先例を、東洋の中に、そして東洋を通じて西洋の錬金術の中に見いだしたのだということを強調する。

第1章では、フロイトとの別れを色づけた著作『変容の象徴』の旧版と改定後の新版とを比較しながら、東洋哲学の研究にも重要な意味を持つという「変容」概念について検討する。つづく第2章は、人間の人格の根底にあるものとしての集合的無意識概念について検討し、先に述べた「変容」と「個性化」を絡み合わせる。そして第3章では、『太乙金華宗旨』を、錬金術や仏教の瞑想法と比較しながら、集合的無意識・元型などのユング心理学の概念が普遍性を持っていることを示す。

第4章は、これまでの科学史、精神医学史を検討しながら、深層心理学の理論が方法上はこれまでの科学の学科におさまらないものであることを認めつつ、「プラグマ（実践知）としての知」という概念を提唱し、現代科学の範囲自体を広げる必要があるとしている。この議論は、第6章の共時性についての議論とつながることになる。

第5章は、M. ウェーバーの西洋近代論と比較しながら、近代合理主義を生まなかった

東洋にもまた、人類全体にとって普遍的意味と妥当性を持つ高度な文化現象が存在していたというユングの仮定について検討する。東洋的な知と西洋的な知とは異なるものであるが、人格に普遍的なものを追求する深層心理学はこうした東洋的な知について述べるができるとする。湯浅は東洋的な思考様式が、神の恩寵を待つのではなく、救済の方法を人間的な意図の領域にずらす「心理学的救済論」であるといった。この用語は言いえて妙である。この章において、湯浅はユングを全面的に評価するわけではなく、東洋哲学の把握は不十分であるが、その体験の心理学的検討は優れていると述べる。

第6章は、それまでの章とやや趣が異なる。それまでの章は東洋の瞑想法と関連させて、人格の深層には、人間を彼に本来的な完成へと導く（個性化を促す）目的論的な働きがあるという前提のもとに、「変容」概念をその軸として、ユング心理学の持っている意味を検討した。晩年の共時性思想を扱った第6章は、もちろんこうした議論の延長上にあるが、共時性概念は科学体系全体の検討を要求するものであり、そうした意味から、第5章までのせいぜい人間心理の域に止まっていた議論とはかなりことになった印象を受ける。湯浅は共時性概念に関わる問題点として、『易経』とラインの超心理学からの影響（集合的無意識の考えを、時間軸のみでなく空間軸に拡大するという）と、現代科学に対する方法論的問題意識（とくに物理学を対象として）とが重要であると言っている。ところで、ユングが物理学の議論にまで介入することとなったこの共時性概念の根底にあるのが『易経』の思想であるということから、彼にとって如何に東洋が大きな意味を持っていたかということが、あらためて察せられる。

しかしここで注意すべきことは、あくまでユングは西洋の人間であり、東洋について論じるのも、西洋の問題意識からであると言うことである。この点で、ユングはやはり西洋の思想伝統の中にあり、後に述べるが、西洋

の思想伝統とユングの思想との断絶面のみを強調する湯浅のような見方には、私は疑問を感じている。

2. 資料とその解釈について

湯浅が参考資料として註に挙げている文献は、当然のことながら、ユング自身によるものが大半を占める。これら一次資料に、『全集』と『自伝』に加えて、英語版の『ユング書簡集』が入っていることは注目してよいと思う。この書簡集は、1906年から1961年までの書簡をおさめたもので、1975年刊である。

(Walter出版による独語版は1972年→73年)

第6章において、超心理学者ラインとユングとの交流について述べている部分は、ほとんどこの『書簡集』をふまえている。湯浅が引用している書簡の私的な内容から察せられるように、ラインとの関係についてはほかに資料がないのであろう。

二次資料はH. エレンベルガーの『無意識の発見』、さらに、B. ハナーの『評伝ユング』などを中心に、湯浅自身の論文がいくつか引かれている。『ユング書簡集』同様、深層心理学史の研究において、近年次々と新しい資料が公刊されているが、前作『ユングとヨーロッパ精神』のときは未公開であったこれらの資料が参照されているのは評価できる(ただその資料を全面的に生かし切れてはいないと思う)。

深層心理学の各派が、その創始者の性格的特性に大きく依存するものであることは現在では自明のことである(この点で湯浅は、特定の文脈から生じその中でのみ有効性を持っているという深層心理学の特質を忘れていない)。[プラグマ]としての深層心理学理論は、ある程度の有効性は持っていますが、湯浅の言うほど普遍的ではない。深層心理学史研究の動向は、ことにエレンベルガーの『無意識の発見』以来、そのような背景にも関心を向ける傾向がいっそう強まってきた。本書もそうした流れの中に位置づけることができる。ユング自身がさまざまな理由から執筆を拒み、

執筆を決心したあとも全集には入れないでほしいと依頼したという『自伝』。湯浅が東洋的な瞑想体験について記述されたものと、ユング心理学とを比較しようとする時、たびたび『自伝』あるいは体験的な記述の部分に依存していることを鑑みると、湯浅にとってユング自身の主観的な体験が如何に重要な意味を持っているかが分かるであろう。なぜなら、ユングの体験のあらゆる部分が、湯浅にとっては、「東洋的」に説明しうるもの(心理的現実!)であったから。

3. 思想史的な問題

共時性と深層心理学の理論的基礎について検討しながら、湯浅は西欧近代思想(科学を含む)と深層心理学との歴史的・本質的な非連続性を強調する。そして、実際に深層心理学はアカデミズムの世界からは受け入れられなかったと述べる。また、共時性について論じながら、西欧近代科学が、因果性・大数原則にのみ固執して、因果性を持たない統計的例外(「偶然」)についての検討を怠ってきたと批判し、深層心理学(特にユング心理学の理論)はこれまでの科学への方法論的批判となりうるという。第4章、第6章でこれらの議論が展開されるわけだが、湯浅の主張がほぼ的を得ていることを認めつつも、いくつか疑問点を挙げてみよう。

まず、深層心理学の諸概念は、決して西洋近代思想の伝統から切り離して論じるものではない。無意識の力動的な性格についての考察は、既にプラトンの『国家論』において見いだされる。湯浅が理性主義的な西欧の思想家の典型としてあげているカントが、知覚不可能な心的過程についての考察をも行っていたことは、『純粹理性批判』を読めば分かることである。また、1868年に『無意識の哲学』を著したフォン・ハルトマン、あるいはカール・グスタフ・カールス、ニーチェといった哲学者たちがどれほどフロイトに影響を与えているかも、いまさら述べることはない。湯浅は、これらの哲学的考察とフロイ

トの経験的研究とが全く次元の違うものであるというユングの言葉を引用するだけで、自分自身は別のところで、西洋哲学史では無意識の問題は論じられてこなかったようなことさえ言っているのである。さらに、デカルトの意識の哲学による影響にも関わらず、無意識の現象が19世紀フランスの実験的研究の主題となっていたことをあげておこう。フロイトの重要な発見のいくつかは、このような背景のもと、パリにおいてなされたのである。

共時性に関しては、因果性に疑問を呈したのは、ユングが初めてではないということを示したい。D. ヒュームは18世紀に、因果性の概念はわれわれが継時的現象を関係づけるために導き出しただけのものであるとして、因果性を絶対とみる見解を批判している。

さらに、湯浅は、深層心理学がアカデミズムの世界に受け入れられなかったと言うが、ヨーロッパ、特にウィーンのような土地に関しては事情は逆転する。アメリカの心理学者の多く（その中には行動主義心理学の提唱者ワトソンもいる！）精神分析に対して示した関心と高い評価は、多くの研究者によって指摘されている。フランスやイギリスの事情もまたアンビヴァレントである。

加えて、療法としての深層心理学の意義を湯浅が強調するなら、行動療法などの立場からの精神分析の実効性についての強力な批判を、湯浅は全く検討していないことを指摘しよう。本書の主旨からは大幅に外れることになるが、これらの批判を無視しては療法としての意義について確実なことは何も言えないではないか。

4. 東洋と西洋／内向と外向

西洋と東洋という分類自体、私は非常に大雑把な印象を受ける。湯浅自身、東洋をインドと中国とにわけて論じる必要を述べていながら、しばしばこれらを混同してしまっている。（西洋もわかる必要があるのは既に述べたとおりである。）

ユングにとっての東洋とは、クンダリニ・ヨーガや『太乙金華宗旨』などの瞑想的な技術を示すインド系の思想と、共時性概念への重要な示唆をもたらした『易経』などの中国系思想との二つに分けることができよう。個々の思想を検討する時は、湯浅は厳密に両者をわけて検討しているのである。ところが、キリスト教的な理性・倫理と比較しながらこれらを論ずる時、湯浅は東洋という言葉で両方を代表させている。文脈から読み取るかぎりでは、ある時はインドを指し、またある時は中国を指し、また両方をともに指していることもある。東洋と西洋に、それぞれ内向型・外向型の類型を当てはめる時も同様になっている。東洋、あるいは西洋と呼ばれる中に含まれる差異の可能性を切り捨ててしまっているのである。この分類を用いたユング自身の混乱もあるだろうが、それにしても湯浅の比較の仕方は包括的過ぎるように思う。

湯浅は、西洋哲学は常に外界との関わり、意識の問題にのみ目を向けてきたのであるから、外向的な哲学であると言えるとする。これに対して、東洋の哲学は瞑想法などを通じて無意識の問題について思索を積み重ねてきたから、内向的であるとする。これは確かに西洋哲学のある一面を言い当てている。しかし、これはユングの類型ではなく、湯浅独自の用語法であろう。意識の問題との関わりだけで、ユングは内向・外向を分けているだろうか。内省的であったユングが周囲に受け入れられず、西洋は外向的なものの考え方が主流であるといった言葉をそのままとれば、西洋の多くの哲学者もユング同様に内省的であり、周囲に受け入れられなかった。ユングの『心理学的類型』の中では、典型的な内向型の人間としてカントが挙げられているが、これは湯浅がデカルトと並べて典型的な西洋哲学者として述べていたのと同じカントである。

もし、湯浅の言うような内向・外向類型をそのまま受け入れたとして、徹底的に内面へ向かっていくと、結局どのような人間にいきつくのであろうか。外界とほとんど関わりを

持たない、神秘家のような人間が、内向型の典型例になるのだろうか。私は内向・外向という両概念の境界線を、湯浅の言うような形で実際に引くことが可能なかどうか、疑問に思っている。

5. 湯浅泰雄と東洋

すでに述べたように、資料自体はとくに新しいものはないし、そこから出てくる見解も、なるほどという域で止まるものが多いように思われる。ユングに関する二次文献は無数にあり、それらの中でも今日権威を持って認められている文献は皆が踏まえている。こうした状況の中で、湯浅の問題意識の意義はどんな所にあるのだろうか。

私は、東洋の修行研究という逆の立場から、ユングの持っていた問題関心についてあらためて再確認（問題点を蒸し返し）していることが挙げられると思う。ユング心理学は、東洋的な知の体験的理解ではなく、分析的説明の道を選んだ。深層心理学は東洋におけるいくつかの修行法（瞑想法と呼ぶべきか）の心理状態を、教義的には不十分さは残るとしても、心理学的には極めて適切に記述しているという。湯浅は、これまでの宗教研究が教義などの表面的な差異を強調するのみで、教義を越えた深い宗教体験における心理学的な普遍性を無視していると批判している

のである。さらに議論は深層心理学の方法論に及ぶ。本書の意義は、東洋の側からこれらの問題をもう一度考えようとしたことにあると言えよう。

東洋的瞑想という視点からこそ、ユングを正しく評価できるということが、本書では角度をかえながらくりかえし述べられている。湯浅が追求したものは、ユングの業績の中でこれまで十分に理解されていなかったものに対する、東洋の研究からの理解可能性である。それゆえ湯浅は、ユング派でない多くの研究者にも客観的研究として評価の高かった『心理学的類型』よりも、神秘的であると批判された『自我と無意識の関係』や『変容の象徴』を重視したのである。

西洋文明の中で育ったユングは、西洋文明のための東洋研究を行った。湯浅は、東洋文明のためのユング研究を行おうとした。いずれも困難な仕事である。しかし、本書で述べられたいくつかの視点は、ユング研究が東洋にも貢献しうる可能性を示していると思われる。そして、宗教学という、何となく深層心理学に似ている学問を学ぶ私たちも、差異を強調するあまり細分化の極致に到達してしまったアカデミズムにたいする湯浅の批判に、学ぶところがないわけではないだろう。